

世界遺産の島に眠る 江戸期からの土埋木「屋久杉」 厳しい気候が作る長寿の木

屋久島は、鹿児島県の大隅半島沖、約60kmの海上に位置し、1993年にユネスコの世界遺産に登録されています。島の90%は山地であり、中央部には日本百名山の二つで九州地方最高峰の宮之浦岳(1,936m)がそびえ、巨大な花崗岩が貫入しています。海からの強風、年間を通じて雨が多く、山の麓は亜熱帯の気候に属しながら山頂付近の年間平均気温は6〜7℃。国内で積雪が観測される最南端の島です。この厳しい環境下に育ち、樹齢1000年を越える杉の木が「屋久杉」です。

複雑で緻密な柰目は、過酷な環境を力強く生きた証

「この座卓の柰目を見てください。まさに宝の木です」と語る古賀通弘さん。年輪が詰まり、複雑な柰目を映し出すテーブルは、芸術品そのもの。

昭和30年代頃は、屋久杉の市場価格はそれほど高価でもなく、建具などにもたくさん使っていました。国有林での伐採が2001年に終了し、今では大変貴重なものになりました。ここにある家具に使われた屋

久杉は、江戸期に伐採されたり、倒れたりして山中に放置されていた木(土埋木)なのです。

屋久杉は、強風、多雨、養分の少ない硬い地質、厳しい寒さに耐えながら育つため、時には身を捻じ曲げながら、長い年月をかけてゆつくりと成長します。そのため、他の杉には見られない複雑な模様が表れます。また、樹脂が非常に多いため、腐りにくく丈夫で虫にも強い。1000年以上も生き、400年以上も前に切られた状態のまま「土埋木」として残っている理由なのです。

樹脂の多さや木のうねりが加工を難しくする

古賀さんは、加工の難しい屋久杉を原寸から家具や小物まで一貫して作り上げる数少ない職人の一人。

「樹脂が多いので、目詰まりしやすい。中に空洞があったり、柰目の流れが変わったりもします。職人は木を見て考えます。あらゆる角度からじっくり

観察しながら
どんな家具に
すれば木の

見事な柰目は屋久杉の中でも最高峰。テーブルに生まれ変わった「宝の木」。



現代の生活スタイルに合わせ、本当に喜んでもらえる家具を

ひと昔前は和室があるのが当たり前だったのが、今の住居は洋風が増え、マンションなどでは和室のない家もあります。「たとえば筆筒や引き出し、仏壇であって

使用は、やがては壊れる。埃がはまると、お客さまの興味を持っていただく工夫も。合わせは、壊れやすい部分には、彫りガラスをはめ込んで、愛着を持っていただくようにし、埃がはまらぬよう、彫りガラスをはめ込んで、愛着を持っていただく工夫も。



特性を活かせるのかを想像し、柰目を見ながらデザインします。そしてご神木のように貴重な木をいかにして無駄なく製材するのかを熟考するのです。緊張の一瞬ではありますが、それは自然の素材を使ってモノづくりをする職人の醍醐味でもあります。自分の世界を作り上げ、人と違うものを作ることが職人としての誇りなのです」。

木質を活かした飾り棚



細部にも繊細な彫刻

も、お客さまの家の雰囲気合ったデザインが必要です」と古賀さん。また最近では、古い旧家をリフォームする人が、昔の木の柱や欄間を現代風にアレンジして使えないかという相談も多いとのこと。

「伝統にのみこだわらず、お客さまと打ち合わせをしながらその方に愛着を持って使っていただけるデザインをご提案しています。たとえば趣味の作品(ステンドグラス、パッチワーク、彫刻など)を家具に入れ込むデザインを、ご提案することも増えました」。生活様式の変化から輸入物が増え、日本社会から、和のものがどん



柔らかな光を放つ格子造りの灯り

どん失われる昨今。「近年は鍛冶屋さんがいなくなり、和の筆筒に合う金具が国内で手に入らなくなりまして。私たち職人たちの仕事がいなくなっています。そして残念なことに屋久杉も、もう新しい材料は手に入らなくなります。幻の木となりつつある屋久杉の家具を少しでも後世に残したい。それが私が果たすべき役割だと思っています」。



安価な既製品で満足する人と、モノに対してとことんこだわりを持つ人とお客さま層が両極端になってきたと古賀さん。「モノにこだわりを持つ人は、私と接点が多い。その人と私の世界観が融合して一つのモノをつくり出せたときは、作り手にとって最高の喜び」。

作家 古賀 通弘氏 Koga Michihiro

有限会社 古典木工 代表取締役

屋久杉、和家具、飾り棚、座卓、婚礼家具、小物、仏壇づくり。製材からデザイン、製造までを一貫して作り上げる技能等が多方面で評価され、2011年福岡県版「現代の名工」と称される「福岡県優秀技能者」の一人に選ばれる。



屋久杉(イメージ写真)